

光源氏の「うつせみ」の歌について

——「空蟬」が「身」を変えることの意味——

朝 日 眞 美 子

はじめに

源氏物語空蟬巻において、夏の夜、近づいてきた源氏に気づき、小桂を残して寢所から去った女性（以後、空蟬の君と呼称する）に対して、次の歌が源氏から小君に託されている。

うつせみの身をかへてける木のもとになほ人^aがらのなつかしきかな⁽¹⁾

（空蟬、一一六頁、以下、当該歌と略称）

源氏の立場からすれば、数々の困難の末にやっと逢えると思った空蟬の君の姿はなく、残されているのは彼女の小桂だけという状況は、くやしきはずがなく、「かの人の心を、爪弾きをしつづうらみたまふ」（同）と描かれているのだが、当該歌は「なつかしきかな」で終わっており、そのような心情は描かれない。傍線部^bの「人がら」は「人殻」（残された小桂）に「人柄」を掛ける」（新潮日本古典集成）と注されており、他の現行注釈書もほぼ同じ内容であることから、源氏は残された小桂に空蟬の君の「人柄」を感じ、慕わしく思ったという心情を、当該歌には詠み込んでいるのである。

また、傍線部 a について、新編日本古典文学全集は「身をかへ」は、蟬の幼虫が樹木に登って成虫に脱皮・変態して殻を残すこと。空蟬が薄衣（人殻）だけを残していったことを喩える」と注している。この点に関しての詳細な検討は第二章で加えるが、現行の諸注釈書においては、空蟬の君が残した小桂と幼虫の蟬が残した抜け殻との関連を重視するあまり、傍線部 a 「身をかへ」については、まだ十分な検討がなされていない状況であるように見受けられる。

本稿では、当該歌の「身をかへ」に着目し、古注釈書から現行注釈書における「身をかへ」についての解釈と、源氏物語と同時代の文学作品における「身」を「変ふ」の用例を検討し、この表現の意味について考察する。そして当該歌についての新しい解釈を試み、この歌に込められた源氏の心情についても検討する。

一、「身をかへ」についての諸注釈書の見解

当該歌「うつせみの身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな」について、『花鳥余情』⁽²⁾は次のように注している。

蟬^aのもぬけたるを身をかふといふ^b 人からは蟬のからによせたるなり

傍線部 a では、「蟬のもぬけたる」ということを、「身をかふ」ことであるとしている。この「蟬のもぬけたる」の「もぬく」という動詞は、『倭名類聚抄』卷十九に「蛻 蛻蛻附 野王案蛻 始悦反音税訓毛沼久 蟬蛇之解皮也 本草云蛇蛻一名龍子衣 和名倍美乃毛奴介⁽³⁾」とあり、「蛻」の訓として「毛沼久」（もぬく）があり、蟬や蛇が皮を脱ぐこととされている。蛇については、身体が大きくなるにつれ、複数回脱皮することが知られているが、蟬の脱皮は幼虫から成虫になる時の一回限りである。したがって、蟬の脱皮ということは、一般的には幼虫から羽化した成虫になることをも意味しているが、「もぬく」という語は、あくまでも皮を脱ぐことを意味しており、蟬が成虫となることは「もぬけ」た後の

結果にすぎない。

このような視点に立てば、傍線部 a の「蟬のもぬけたる」ということは、蟬が皮（殻）を脱ぐことを完了したこととなる。傍線部 a ではこの「蟬のもぬけたる」ということが「身をかふ」ことであるとされているので、これを当該歌の第一・二句「うつせみの身をかへてける」に当てはめると、「うつせみ」が殻を脱いでしたという事となる。先に検討したように、「もぬく」という語には成虫になる意が含まれていないので、「もぬく」という動作が完了したということは、そこに「もぬけ」（抜け殻）が残されているということを意味する。したがって、当該歌の第一・二句「うつせみの身をかへてける」について、傍線部 a では「うつせみ」が殻を脱いで、抜け殻が残されていると解釈していることとなる。

そして、その文脈から傍線部 b 「人からは蟬のからによせたるなり」につながら、「人から」という語は、「蟬のから」（残された抜け殻）に関連づけた言葉であるとしている。つまり、空蟬の君という人が衣を脱ぎ捨てたことを蟬の脱皮に喩えることから、脱ぎ捨てた衣を「殻」と見立て、人が脱いだ「殻」ということで、この衣のことを「人から」（人殻）としたとしている。

このように『花鳥余情』では当該歌を、幼虫の蟬が脱皮して、抜け殻だけが残された状態となることを「身をかふ」であると解釈している。

また、当該歌の第一・二句「うつせみの身をかへてける」については、賀茂真淵の『源氏物語新釈』⁴に、次のような注がある。

空蟬の身をかへてける うつせみは萬葉の比までは顕あきの身てふ意にて、うつそみの妹、うつしみとおもひし時などさへいへり、然るを万葉に字を借て空蟬と書、又顕身ははかなく死ぬ意にもいへるを、たゞ蟬のもぬけの事とのみ

思ひ誤りたる事、紫式部の頃に至りてはひとへにもぬけの事とのみおもへるもむべ也、此女房かくかしこしといへど時に古学のなければをしむへし

○人体を人空といひなして衣にたとへたり○身をかへてもぬけにたとふ

『源氏物語新釈』では、「うつせみ」は、万葉集の時代では「顕の身」という意味の言葉であるが、その表記に「空蟬」を用いたために、誤って「うつせみ」を「蟬のもぬけの事」と考えるようになったこと、そして紫式部の時代には、「うつせみ」は「もぬけの事」と理解しているのは当然だとしている。そして、さらに、このような誤りをするのは、紫式部に「古学」がないからだとしている。

また、この注の末尾に「身をかへてもぬけにたとふ」とあり、『源氏物語新釈』においても、先述の『花鳥余情』と同様に「身をかへて」は「もぬけ」（抜け殻）になる意味として注している。

この賀茂真淵の『源氏物語新釈』に見える「うつせみ」についての注は、本居宣長の『源氏物語玉の小櫛』には言及がない。古注釈の集大成と位置づけられる萩原広道の『源氏物語評釈』の「語釈」においては、『源氏物語新釈』の前掲「うつせみは萬葉の比までは顕の身てふ意にて」から、「此女房かくかしこしといへど時に古学のなければをしむへし」までが引用され、続いて次のような萩原広道の注が記されている。

うつせみの解は右にいはれたるごとくなれど、こゝにうつせみといへるはたゞ蟬の事にて、もぬけまではあらぬこと也。さて身を**かへて**けるとあるが、やがてもぬけたる事也。然れども此語によりて蟬をうつせみとはいへりとおぼしければ、空蟬の字をにははせたることは論なし。それやがて歌の巧なるなり。このかへし歌にうつせみの羽おくつゆのとよめるにて、うつせみはたゞ蟬の事なるよしを知るべきなり

萩原広道は「うつせみ」という語についての解釈は賀茂真淵の『源氏物語新釈』の注の通りだが、傍線部aのように、

この歌の「うつせみ」はただ蟬の事を指しており、「もぬけ」（抜け殻）までにはなっていないとしている。また傍線部bで、「身をかへてける」とは、蟬が「もぬけたる事」としており、先に検討した『花鳥余情』や『源氏物語新釈』と同様の見解をとっている。すなわち、萩原広道は賀茂真淵とは違い、「うつせみ」は蟬のこととしながらも、「身をかへてける」については、蟬が抜け殻になることであると考えているのである。

このことは次の、空蟬巻の本文の上部に記された『源氏物語評釈』の注においても確認することができる。

うつせみはこゝにてはたゞ蟬の事なり。身をかへてけるとは蟬の蛻けたるを云。さるからに空といふことをかくくそへていへるまでなり。一首の意は我をいとひてにげ隠れたるはうらめしけれど猶用意ある人品のなつかしきといひて人がらに蟬の蛻けたる殻をいひよせてかの小桂を人の殻とさしたるたくみなり。このもとにといへるは蟬の樹下にて蛻くるになぞらへてかのきぬを脱すべしたる所をいへる也。諸注用なき事のみ多くして歌の意をとかれたるもなきはいかにぞや。

傍線部aでは「うつせみ」は蟬のことであると注し、傍線部bでは「語釈」よりもさらに『花鳥余情』の「蟬のもぬけたるを身をかふといふ」に近い表現をとって、「身をかへてける」について注している。

これらの萩原広道の注を高く評価したのが島津久基で、『対訳源氏物語講話』において次のように注している。

【語義】【空蟬】ウツセミ。蟬のこと。空は蛻（モヌケ）の空しき殻となることの聯想から添へた字。

【釋評】なほこの歌の「うつせみ」は古くは「うつそみ（顯身）」と同語で、萬葉にそれを「空蟬」と借字して用ゐてあるのを、いつか紫女の時代頃には蟬の蛻のこととのみ思ふやうになつたのであるとして、才媛ながらこの作者は古學に疎いのが惜しいと、萬葉學者の眞淵から論難せられてゐる（新釋）が、これを廣道が辨じて、語源論からは眞淵の説の通りであるが、この歌では「身をかへてける」といふのが蛻のことで、「空蟬」は單に蟬の意である

ことは、返歌の「空蟬の羽に置く露の」といふ用法でも知り得られ、但し蛻の聯想から蟬を空蟬と言つたらしいから、勿論この語で蛻をも匂はせてゐるのではあらうし、それが歌の巧な所であると論じてゐる（評釋の語釋）のは周到で肯綮を得てゐる。

島津久基も傍線部 a で「うつせみ」は蟬のことであるとしている。また傍線部 c では「身をかへてける」というのが「蛻」のこととされており、この「蛻」は傍線部 b で（モヌケ）と訓じているので、傍線部 c では「身をかへてける」は「もぬけ」（抜け殻）になることと考へてゐることがわかる。

以上のように、一条兼良の『花鳥余情』、賀茂真淵の『源氏物語新釈』、萩原広道の『源氏物語評釈』、島津久基の『対訳源氏物語講話』では、当該歌の「身をかへてける」を蟬が抜け殻になることとして解釈している。このように蟬が脱皮した結果、その抜け殻だけが残されていると当該歌を解釈することは、この物語で描かれている空蟬の君の衣はあつても、その中にいるはずの人はいないという状況に、そのままではめるのには極めて都合が良い。しかし、「身をかへてける」という表現が、このような状況を表すことを意図しているかという点、それは、別問題として検討すべきである。

次章では他の現行注釈書で「身をかへてける」がどのように解釈されているかを中心に検討する。

二、現行注釈書における「身をかへ」の解釈について

本章では「身をかへてける」にどのような注が付けられ、現代語訳されているのかについて、前章で検討した島津久基の『対訳源氏物語講話』以後に刊行された現行注釈書を対象に検討する。

(一)〔頭注〕「身をかへ」は、蟬の幼虫が樹木にのぼつて成虫に脱皮・変態して殻を残すように、薄衣（人殻）だ

けを残していったこと。

〈現代語訳〉

蟬が脱け殻をのこして、姿を変えて行ってしまった後の木の下で、もぬけのからの衣をのこしていったあの人の気配が、やはり懐かしく思われる。
 (『日本古典文学全集』小学館、一九七〇年)⁽⁷⁾

(二)〔頭注〕「身をかへ」は、蟬の幼虫が樹木に登って成虫に脱皮・変態して殻を残すこと。空蟬が薄衣(人殻)だけを残していったことを喩える。

〈現代語訳〉

蟬が脱け殻を残して姿を変え、去ってしまった後の木の下で、もぬけの殻の衣を残していったあの人の気配をやはり懐かしく思っている
 (『新編日本古典文学全集』小学館、一九九四年)⁽⁸⁾

(三)〔注釈〕「身をかへてける」は、蟬の幼虫が殻を残して脱皮すること。それと同様に、空蟬は薄衣を「脱ぎすべし」(空蟬六)で抜け出して行った。

〈現代語訳〉

蟬が抜け殻を残して、姿を変えて去ってしまった後の木の下で、あの人が脱ぎ捨てて行った薄衣に残る香を慕いながら、やはりあの人に心惹かれることよ。
 (『源氏物語注釈』風間書房、二〇〇〇年)⁽⁹⁾

(四)〔鑑賞欄〕歌の「空蟬の身をかへてける」は、蟬が抜け殻を残して姿を変えることであり、そこに空蟬が薄衣

の小桂を残して寝所から去ったことをよそえている。

〔語句解釈〕 第三句までが、「殻」^{ママ}を導く序詞。

〔現代語訳〕

蟬が、身を変えて去った木の下には、も抜けの殻が残るように、薄衣の小桂を残して去ったあの人の人柄が、やはり懐かしいことです。
 （『源氏物語の鑑賞と基礎知識』至文堂、二〇〇一年）¹⁰

（一）の『日本古典文学全集』（以下、『全集』と略称）で「身をかへ」の注に、傍線部「成虫に脱皮・変態して」という内容が記され、（二）・（三）・（四）はその方向性を踏襲している。このような注は『全集』以前の注釈書には見られず、前章で検討したように『花鳥余情』以来、「身をかへ」は抜け殻となることとして解釈されてきた。

このように、「身をかへ」という表現に着目したという点においては、『全集』の注は画期的であるといえる。しかしながら、（二）の『全集』の注の破線部には「殻を残すように」とあり、現代語訳の破線部には「脱け殻をのこして」とあり、『花鳥余情』以来の「身をかへ」を抜け殻となることとして解釈してきたことをも採用しており、折衷案とも言うべき様相を呈している。そして、当該歌の注では蟬の幼虫が成虫に脱皮・変態することを記しながらも、現代語訳としては、「殻を残すこと」の方が「身をかへ」という表現の本質であるという書き方となっている。このことは（一）の『全集』以後に刊行された（二）・（三）・（四）にも同様に認められる。

このような折衷案をとらず、次の現行注釈書のように、『花鳥余情』以来の「身をかへ」を抜け殻となることとして解釈しているものもある。

(五) 蟬のもぬけになって、姿かたちを変えてしまったあとの木の根本に、それでもなおあの人のぬけがら(薄衣)の残した人柄が懐かしく思われるよ。
(『新日本古典文学大系』源氏物語、岩波書店、一九九三年)⁽¹⁾

(六) 蟬が蛻(もぬ)けになって姿かたちを変えたあとの木の根もとに、それでもやはり(抜け殻(がら)〈薄衣〉ならぬ)人がら(ひととなり)が慕われるよな。

〔解説〕 源氏物語の世界、藤井貞和

(Ⅰ) は「空蟬の身を変へてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな」

(Ⅱ) は「空蟬の羽におく露の木がくれて忍びく／＼に濡る、袖かな」

を提示して、

(Ⅰ)(Ⅱ)の歌は物語に単純にはめ込まれてあるのではなく、あるいははめ込まれているとしても、現代語訳を与えようとすると限界の感じられることで、(Ⅰ)と(Ⅱ)とは歌じたいが技巧をこらして引歌や用語を共通に分け合う。「空蟬」という語は物語中にここが初出で、蟬になる際に地中から木をのぼって蛻けになるという生態観察がそこにある。その抜け殻(女が残した薄い小桂一枚)が空蟬で、人物をただちに意味するわけではない。それを「人がら」にひっかけて、正身(女君そのひと)が親しく慕わしく思い出されるのだと言う。これらの贈答歌を受けて、夕顔巻以下で女君のことを空蟬と称するのであって、逆ではない。
(源氏物語、岩波書店、二〇一七年)⁽¹²⁾

(五)では、第一・二句「うつせみの身をかへてける」を傍線部「蟬のもぬけになって、姿かたちを変えてしまった」

と現代語訳しているが、これは第一・二句全体で生きていた蟬の幼虫が、姿かたちを変えて抜け殻になってしまったという意味として読めるが明確ではなく、(六)も蟬が抜け殻となって、幼虫の時とは姿かたちを変えたという意味かと思われるが、やはり明確ではない。ただ、はっきりしているのは、当該歌の解釈は、そこにいたはずの幼虫の蟬が抜け殻になってしまった、ということ重要視しているということである。

以上のように多くの現行注釈書では、蟬がその「身」を変えることを、生きている幼虫から、抜け殻に変わるということに主眼を置いた解釈がとられているが、「身をかへ」という表現をどのように把握して良いのであろうか。次章では、源氏物語や同時代の他の文学作品における「身」を「変ふ」の用例について考察する。

三、「身をかへてける」の意味について

前章で検討したように、当該歌の「身をかへてける」は古注釈書から現行注釈書に至るまで、蟬が脱皮によって、抜け殻を残したことを重視して解釈がなされている。しかし、源氏物語にみえる、他の「身をかへ」の用例には、このように「身」を変える前の立場に主眼のあるものではなく、身を変えた後の立場から表現されているものばかりである。

①身をかへてひとりかへれる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く

(松風、一二九頁)

②身をかへてのちも待ち見よこの世にて親を忘るるためしありやと

(朝顔、二〇三頁)

③身にあまるまで御かへりみを賜はりて、この君の御徳に、たちまち身をかへたと思へば、まして行く先は、ならぶ人なきおぼえにぞあらむかし。

(少女、二二八頁)

④この年ごろは、同じ世の中のうちにめぐらひはべりつれど、何かはかくながら身をかへたるやうに思うたまへなしつつ、させることなき限りは、聞こえうけたまはらず。

(若菜上、一〇二頁)

①は明石の君の母である尼君の歌である。尼君の祖父「中務の宮」（松風、一二〇頁）が所有していた大堰川のあたりにある山荘を修築して、明石から転居し、母子二人で住むようになった時に詠まれたものである。「身をかへて」は明石の尼君が尼の身となり、明石に行く以前とは全く違った境遇になったことをさしている。

②は「親の親」という一言ゆえに、光源氏との縁は忘れられない、という源内侍の歌に対する光源氏の返歌である。「親の親」とは、桐壺院がかつて源内侍のことを、「祖母殿」（朝顔、二〇一頁）と呼んでいたことを踏まえている。祖母とはすなわち「親の親」であるので、「祖母殿」と呼ばれたことを、このように言い換えて歌に詠みこんでいるのである。この歌に対して光源氏は、あの世に生まれ変わって見てください、この世の人が親を忘れる例があるだろうか、と返歌しており、源内侍がああ世でも「見る」ということを意識している内容になっている。

③において、「身」を変えたようだとされているのは夕霧の教師となった大内記である。大内記は夕霧を教えたことによって、「身にあまるまで御かへりみを賜はりて」と、きわめて大きな物質的報酬や、社会的な名声を得ている。その結果、この大内記はそれまでの服装を改めて、立派な身なりを整えることができるようになるなど、周囲から一目置かれる存在となっているはずである。その立身出世した姿について、以前の姿と比べて、「身」を変えたようだと言っているのである。

④は、明石の女御が男御子おとみこを出産後、明石の入道が入山するに際して、娘の明石の君に託した遺書の内容である。明石の入道が、孫娘が東宮に入内した頃からは、手紙も書かず、女御の祖父としての立場を全くとってこなかったことが書かれている。明石の入道は娘が幼少の頃の教育や光源氏との結婚には、積極的に関与したが、孫娘については、一転して、何も関わってこなかったというのである。それは明石の入道が自らに課した生き方である。明石の入道が、「身をかへ」たとは、この世に生きながら、あえて我が子や孫と関わらずに、女御の祖父であることから生じる権力や富と

は無縁のあり方で生きるという道をとったということである。

以上のように、①は明石の君の母が、尼という在俗の頃とは違う生き方をする、②は源内侍があゝの世に行つて、この世の親子の關係を見るという、歌の上での仮想された話、③は夕霧の教師となつた大内記が立身出世した後の姿、④は明石の入道が、光源氏の妻となつた娘が京に転居して、孫娘が東宮に入内した頃から、子や孫娘に極力関与しないという生き方をしていることについて、「身をかへ」という表現が用いられている。すべての例が、その当事者にとつて、「身をかへ」た後のことが主眼となつており、「身をかへ」た生き方がなされる以前のことは言及されていない。

前章で検討したように、当該歌について、古注釈書から(一)の『全集』、(二)の『新全集』、(三)の山崎良幸・和田明美他『源氏物語注釈』、(四)の倉田実『源氏物語の鑑賞と基礎知識』では、幼虫がその殻を脱いで、殻を残すということを「身をかへ」と解釈しており、「身をかへ」る前の幼虫が、成虫になることこそが「身をかへ」ることであるという解釈はとっていない。したがつて、これらの注釈書の解釈では「身をかへ」る前は生きており、その後は生きていた痕跡が残っているだけだということになる。しかし、当該歌以外の源氏物語の用例では、「身をかへ」た後も、①は明石の君の母が尼として生き、②はあゝの世に行つた源内侍がこの世の親子の關係を見ることをし、③は大内記が立身出世して、将来有望な生き方をし、④は明石の入道が娘に極力関与しないという生き方をしている。このように、「身をかへ」る前も後も、生き方が違うだけで、やはりどの例も、それぞれに生きている例なのであり、当該歌の「身をかへ」の例のみを、例外扱いする必然性もないと考えられるのである。

このように違うあり方をとりながら、人が生きることに対して「身をかへ」が用いられる例は、『竹取物語』、『うつほ物語』、『枕草子』にもみえるが、「身をかへ」た後に、生きていた痕跡が残つただけという例は、管見ながら未だ見出すことができない。

①「汝、幼き人。いささかなる功德を、翁つくりけるによりて、汝が助けにとて、かた時のほどとくだししを、そこらの年ごろ、そこらの黄金賜ひて、身をかへたるがごとくなりなり。……」

〔竹取物語¹⁴、七十一～七十二頁〕

②「……この御社にも、さて詣でつるを、あやしく、昔承りし物の音のし侍りつれば、身を変へても、魂や残りて侍りつらむ、承りつけてなむ、神の御徳に、あが君に対面賜はりぬる」。

〔うつほ物語¹⁵、春日詣、一四七頁〕

③身をかへて、天人などはかやうやあらん、と見ゆるものは、ただの女房にてさぶらふ人の、御乳母になりたる。唐衣も着ず、裳をだにも、よういはば着ぬさまにて、御前に添ひ臥し、御帳の内を居所にして、女房どもを呼び使ひ、局にものをいひやり、文を取り次がせなどしてあるさま、いひ尽くすべくもあらず。

〔枕草子¹⁶、一三一段、一八八頁〕

①は、竹取の翁がかぐや姫を見つけた後に、黄金が入った竹を見つけることが度重なり、裕福になって、別人かと思われるようになったことについて「身をかへ」が用いられている。

②は、忠こそが、出家した身の上になったことについて、「身をかへ」が用いられ、たとえ出家した身の上になっても、かつて愛用していた「みやこ風」の琴の音に心惹かれるということが描かれている。

③は、傍線部「ただの女房」が貴人の乳母になることについて、「身をかへ」が用いられている。乳母となると、貴人の側近くに居ながらも、授乳のために裳や唐衣などの正装をせず、ほかの女房達に用事を言いつけることが、現実のこととなる。その様子が「天人など」、人間よりも上位の存在に、「身をかへ」るようだとされている。

このように、①では経済的に裕福になること、②では出家すること、③では貴人の乳母になることについて、「身を

かへ」が用いられており、どの例も「身をかへ」た後のことを表現する際に用いられている。③の「身をかへ」た様子は天人にも匹敵するとされており、人という範疇を越えた想像もなされている。

次の『公任集』¹⁷⁾の例では、娑羯羅竜王の八歳の娘である竜女が、竜身から男子に身を変えするという『法華経』提婆達多品(巻五、第十二)に基づいた歌が詠まれている。

提婆品

さはりおほみ波を分けこし身をかへて蓮の上に入るとこそみれ

(二七一)

『法華経』提婆達多品には「皆見竜女忽然之間變成男子、具菩薩行、即往南方無垢世界、坐宝蓮華、成正覺、三十二相、八十種好、普為十方、一切衆生、演說妙法(皆、竜女の忽然の間に變じて男子と成り、菩薩行を具して、即ち南方無垢世界に往き、宝蓮華に坐して、等正覺を成じ、三十二相、八十種好ありて、普く十方の一切衆生の為に、妙法を演説するを見たり)」とあり、竜女がたちまちに身を変えて男子となり、衆生のために妙法を説く姿を見たところ。ここで竜女は悟りを得る前段階として、男子に「身をかへ」ており、この歌で示されているのは「身をかへ」た後のことのみであり、竜女から男子に「身をかへ」る前の竜の姿形から残るはずの痕跡については問題とされていない。それは、提婆品の傍線部で「忽然の間に變じて男子と成り」とあり、たちまち男子に身を変えることのみが書かれていることとも対応している。

この歌の「身をかへ」で表現されているのは、竜女という「身」を男子という「身」に変えることである。そして、この男子の「身」を得たという結果が、この歌では必要なのであり、そのことによって竜女が竜身、年少、女性という悪条件にもかかわらず、悟りを得ることへとつながり、提婆品をふまえることが明確な内容となっている。

また、『賀茂保憲女集』¹⁹⁾の歌には「身をかへ」の例は見られないが、序文には次のような表現がある。

……はかない鳥といへど、生まるるよりかひあるは、巢立つこと久しからず。はかない虫といへど、時につけて声を唱へ、身を変へぬなし。

この序文では「はかない鳥」に対応して、「はかない虫」のことが述べられ、鳥が生まれた時は卵であるが、それがすぐに巢立つことと、虫がその身を変えて声を上げるようになることが対比的に描かれている。このような表現は『白氏文集』の「前日巢中卵 化作雛飛去 昨日穴中虫 蛻為蟬上樹」〔前日巢中の卵、化して雛と作って飛び去る。昨日穴中の虫、蛻して蟬と為って樹に上る〕〔村居臥病〕巻十、〇六六を踏まえたものと考えられている。²¹ このことを前提に考えると、この詩の「穴中虫」が「蟬」であることは、この序文における「はかない虫」を蟬とする一つの根拠となる。

また、この詩の「穴中の虫、蛻して蟬と為って」は、この序文の「身を変」えるという表現に対応すると考えられるが、ここで大切なのは、「穴中の虫」が蛻した結果、「蟬」となるということであり、「蛻」を残すということではない。『賀茂保憲女集新注』²²は、「身を変へぬなし」を「身を変えないものはない。虫が幼虫から蛹、成虫に変態することをいう」と注しており、脱皮することには触れず、「変態すること」にのみ着目している。前掲『公任集』において、「身をかへ」は竜女が男子に身を変えることに用いられているが、この序文においては「穴中の虫」(幼虫)が「蟬」(成虫)に身を変えることに用いられているのであり、「穴中の虫」(幼虫)が抜け殻になってしまうことについて用いられているわけではないことは、当該歌を考える上でも重要である。

以上、『源氏物語』や、この物語と同時代に成立した文学作品における「身」を「変ふ」の用例について検討してきた。その結果、「身をかへ」が用いられる際には、「身をかへ」た後においてのことが中心になっており、「身をかへ」る前の痕跡が残っていることをいう例は管見ながら見出せなかった。したがって、本稿で検討した諸注釈書のように、当該

歌「うつせみの身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな」の「身をかへ」を、幼虫がその殻を脱いで殻を残すというように、「身をかへ」る前の痕跡が残っていることとして解釈するのではなく、幼虫が成虫に変わることをして解釈するのが妥当だと考えられる。

おわりに

以上の考察から、当該歌「うつせみの身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな」の「身をかへ」は幼虫の蟬が脱皮して抜け殻になるのではなく、幼虫（殻をかぶった身）から成虫（羽のある身）に変わったことと解釈する。⁽²³⁾ また、「身をかへてける」の助動詞「てけり」が過去の動作が完了した結果が存続していることを表しているので、源氏が空蟬の君が居るに違いないと思っていた所（当該歌の「木」に行ったところ、既に「うつせみ」（蟬・源氏が知っている空蟬の君）は姿を変えており、その時に確認できることといえは、「木のもと」に残されていた「人がら」（抜け殻・空蟬の君が脱ぎ置いたと思われる小桂）だけだったと当該歌の状況を理解できる。源氏が行った時には、源氏と同じく、「木」の下で地に足を付けて生きていたはずの幼虫（空蟬の君）は、既に「木」の上に居て、人が関与しない場で生きる成虫となっているというのである。この状況に対して、源氏は自分を避けて逃げていった薄情な人の仕打ちと感ずることも可能であるが、「なほ」と、一人にされてもやはり、その残された「人がら」（小桂）から、あの人（空蟬の君）の「人柄」を慕わしく思う気持ちは変わることはないという心情を歌に詠んでいるのである。

また、「身をかへ」を空蟬の君の立場から考えれば、彼女は源氏が接近する気配を察知して、「生絹ナヅシなる単衣ひとへを一つ着て」（空蟬、一一二頁）その場から逃げていることは、結果として「小桂」から「単衣」に着替えていることとなるのであり、これは蟬の幼虫が殻を脱いで、薄い羽のある成虫になることと対応している。その根拠は、「小桂」が「かの

もぬけを」(同、一二七頁)と、蟬の抜け殻である「もぬけ」に喩えられていることであり、夏用の肌着である「生絹なる単衣」が、薄い蟬の羽に喩えられる可能性は十分にあると考えられるからである。

これらの考えをもとに当該歌を現代語訳すると、次のようになる。

蟬(あの人)が(幼虫から成虫になって、木の上で(小桂から着替えて、違う場に)生きるべく)身を変えてしまっていた木の下で、(私が手にすることができなのは抜け殻(小桂)だけだが)、それでもやはり(身を変えたあの人)の(人柄が慕わしいと思うことだなあ。

このように現代語訳することで、第一・二句「うつせみの身をかへてける」を、抜け殻との関連ではなく、姿を変えて木に上り(違う場に行き)、これまでとは違う生き方をする蟬(空蟬の君)を中心に据えることができる。そして、「木のもと」にひとりで居ることを余儀なくされた源氏の手には「人がら」(小桂)が残されており、それを「なほ」慕わしく思うという心情がくつきりと表れてくる。

当該歌をこのように考えることによって、源氏が当該歌で表現しなかったのは、身近にある「小桂」のみではなく、去ってしまい、手の届かない存在となった空蟬の君のことを思いやる気持でもあるということが明らかになる。空蟬の君は源氏の接近に気づき、自らの「身」を源氏から隔てたが、そのことによって源氏の「心」は「なほ」も変わらなかった、当該歌をこのような源氏による意思の表明として解釈することとしたい。

注

(1)『源氏物語』の引用は源氏物語大成による。私に表記を改め、句読点などを付した。頁数は新潮日本古典集成。傍線部は稿者による。以下同じ。

- (2) 『花鳥余情』の引用は『松永本 花鳥余情』（源氏物語古注集成一、伊井春樹編、桜楓社、一九七八年）による。
- (3) 『倭名類聚抄』の引用は国立国会図書館デジタルコレクション『倭名類聚鈔』（元和三一六一年、那波道円が校訂・刊行した二十巻本の古活字版、書誌ID000007328504）による。
- (4) 『源氏物語新釈』の引用は『源氏物語新釈』（賀茂真淵全集第十三巻、続群書類従完成会、一九七九年）によるが、「うつせみは萬葉の比までは顕の身てふ意にて」の傍線部は「哥」とあり、左に（顕カ）と傍書されている。引用本文は「顕」とし、『源氏物語新釈』（賀茂真淵全集第五、吉川弘文館、一九〇六年）を参照して、「ウツ、」とルビをふった。
- (5) 『源氏物語評釈』の引用は『源氏物語評釈』（国文註釈全書、第十二編、皇学書院、一九〇九年初版、一九二八年発行）による。私に句読点を付した。
- (6) 島津久基『対訳源氏物語講話』（名著普及会発行、一九八三年）より引用。
- (7) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛『日本古典文学全集』源氏物語（小学館、一九七〇年）より引用。
- (8) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『新編日本古典文学全集』源氏物語（小学館、一九九四年）より引用。
- (9) 山崎良幸・和田明美他『源氏物語注釈』（風間書房、二〇〇〇年）より引用。
- (10) 倉田実『源氏物語の鑑賞と基礎知識』（至文堂、二〇〇一年）より引用。
- (11) 柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎『新日本古典文学大系』源氏物語（岩波書店、一九九三年）より引用。
- (12) 柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎『源氏物語』岩波書店、二〇一七年）より引用。
- (13) 津島知明「歌から読む帯木三帖——「帯木」「空蟬」「夕顔」と歌の鉾脈——」（『源氏物語の歌と人物』翰林書房、二〇〇九年）の注八において、「源氏の歌には「蟬のもぬけになって、姿かたちを変えてしまった」（新大系）」という解があるが、「蟬が姿を変えてしまった」と解すべきだろう。女自身は蟬に喩えられている」と、新大系の解釈について、批判がなされるが、「蟬が姿を変えてしまった」の意味する所については、明確な記述が見えない。
- (14) 『竹取物語』の引用は、片桐洋一校注『竹取物語』（新編日本古典文学全集、一九九四年）による。

- (15) 『うつほ物語』の引用は、室城秀之校注『うつほ物語』（全、改訂版、おうふう、一九九五年）による。
- (16) 『枕草子』の引用は、増田繁夫校注『枕草子』（和泉古典叢書、一九八七年）による。
- (17) 『公任集』の引用は新編国歌大観による。私に表記を変えた所がある。
- (18) 『法華経』の引用は、坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』中（岩波書店、一九六四年初版、一九八四年発行）による。
- (19) 『賀茂保憲女集』の引用は新編国歌大観による。句読点を付し私に表記を変えた所がある。なお、引用本文には「はかなきとりといへと時につけてこゑとなへてすをか、ぬなし」（冷泉家時雨亭叢書第十八卷『平安私家集五』所収「賀茂女集」朝日新聞社、一九九七年）の異文がある。
- (20) 『白氏文集』の引用は、那波本『白氏文集歌詩索引』下冊（平岡武夫・今井清、同朋出版、一九八九年）による。
- (21) 久保木寿子「賀茂保憲女集試論―初期百首と暦日観念―」（『文学・語学』一四七号、一九九五年）。和歌文学大系の『賀茂保憲女集』（武田早苗・佐藤雅代・中周子、明治書院、二〇〇〇年）も『白氏文集』の「村居臥病」を注す。
- (22) 『賀茂保憲女集新注』（渦巻恵、新注和歌文学叢書十五、青簡社、二〇一五年）。
- (23) 吉見健夫「空蟬物語の和歌―歌物語的方法と物語形成―」（中野幸一編『平安文学の風貌』武蔵野書院、二〇〇三年）において「二句の「身をかへてける」という特異な表現は、蟬が殻を脱いで飛び立つさまに空蟬が小桂を残して逃げ出したことを喩えているが、蟬が殻を脱ぐことを「身をかへて」などと表現するのは和歌では例がなく、源氏の相手の身が空蟬から軒端の萩に変わってしまったことを掛けているものと思われる」とあり、「身をかへて」を「蟬が殻を脱ぐこと」と理解した上で、和歌に用例がないとする。しかし本稿では「身をかへて」は蟬が殻を脱ぐことそのものを意味するのではなく、蟬としては、幼虫から成虫になることと考えられることを第三章で述べた。また、この章で検討した「身をかへて」の用例から、源氏の相手が空蟬の君から軒端の萩に変わるといふ考えにも首肯しがたい。

（以上）

